

人さしゆびを自分に向ける

5月、さわやかな季節です。校庭などの木々の若葉が美しく目に映えます。見えるものだけではありません。この時季の季語に「風光る」「風薫る」という言葉があります。風も心地いいです。春を五感で感じ取って欲しいです。新年度が始まり、1ヶ月が過ぎました。どの学年の授業でも、学習に意欲的に取り組もうとする姿をみることができます。部活動や習い事なども一生懸命に取り組んでいます。文武両道の精神で頑張っている皆さんを先生方も応援しています。

さてここでは、「人さしゆびを自分に向ける」ということについて、詩人で書家の相田みつをさんが「一生感動一生青春」という本の中で書かれていることを引用しながらお話をしていきます。

私たち人間は、何か失敗や落ち度があると、どうしても「弁解」や「言い訳」をしてしまいます。自分が悪かった、ということを素直に認めたくないのです。何とか他人のせいにしたがります。「自分の責任だ」といさぎよく泥をかぶるのはいやだから、泥はできるだけ他人にかけてしまう、そういう弱さやずるさを人間はもっています。私もそうです。ここでいう「泥を他人にかける」というのは、どういうことなのでしょう。

相田さんは、自分に何かの失敗や落ち度があったということを、自分の着ていた白い服がネズミ色（ネズ色、灰色、グレー）に汚れたことに例え、お話を続けています。

ネズミ色に汚れた物を白（潔白）に見せる方法が一つだけあります。それは、ネズミ色の服の隣に、黒い服をもってくることなのです。二つ並べてみればわかるでしょう。

（実際にやってみる）ネズミ色が白く見えたでしょう。これは人間の目の錯覚です。ネズミ色はネズミ色のままですが、少しごまかせました。このネズミ色の隣に黒をもってくる行為が、他人に泥をかけるということです。そして、それこそが「弁解」です。

どんなにうまく弁解しても、繰り返しになりますが、自分の服の汚れは落ちません。洗濯するしかありません。相田さんは、「素直に謝ること」を「洗濯」と表現しています。弁解も言い訳もせず、素直に謝り、自分の非を認めることが必要です。

弁解や言い訳をしてしまうと、さらにそれをごまかすために、また弁解や言い訳を重ねる・終わりがありません。どうすればいいのか？何かの失敗や落ち度があったとき、まずは、「人さしゆび」を自分に向けることです。「今、弁解や言い訳をしようとしているけど、自分の本心に嘘はないか」と自分自身に問いかけることが大切だと相田さんはお話になっています。人さしゆびが自分に向けば、弁解や言い訳をしなくて済みます。もっと言えば、自分自身を見つめ直し、自らをさらに高めようとするのだと思います。

5月には大きな行事があります。1年生の赤城宿泊体験学習、3年生の修学旅行です。いずれも、実行委員会が中心となって準備を進めてきました。楽しんで下さいね。もちろん、楽しむだけでなく、しっかり学び、成長してきて下さい。